

第 4 次駒ヶ根市子ども読書活動推進計画

令和 5(2023)年 3 月

駒 ヶ 根 市

第4次駒ヶ根市子ども読書活動推進計画 目次

はじめに	2
I 基本計画.....	3
1 計画の目的	3
2 計画の位置づけ	3
3 計画の期間	3
4 計画の対象	3
5 計画推進の基本目標	3
II 第3次駒ヶ根市子ども読書活動推進計画の取り組みと課題	4
1 取り組み.....	4
2 成果と課題.....	5
III 推進のための具体的な取り組み.....	8
1 読書活動の推進	8
(1) 家庭での読書活動の支援	8
(2) 幼稚園・保育園での読書活動の支援.....	9
(3) 小学校での読書活動の支援	10
(4) 中学校での読書活動の支援	11
(5) 高等学校での読書活動の支援	12
(6) 図書館での読書活動の支援	13
2 関係機関、団体、ボランティア等との連携.....	15
3 計画の目標.....	17
[資料]	
1 駒ヶ根市子ども読書活動推進計画策定に関わるアンケート ...	19
(1) アンケートの概要.....	19
(2) アンケート結果	20
2 駒ヶ根市子ども読書活動推進計画策定委員名簿	42

はじめに

子どもたちは読書により、本の世界に浸る楽しさを味わいます。そして、その中で、想像力や思考力を働かせます。本には様々なジャンルがあります。小説、教養本、自己啓発本など、どの本を通してでも、知識、語彙力、文章表現力はもちろん、豊かな心を育てる栄養になっていきます。特に、思春期前後の子どもたちにとっては大切なものです。また、最近の研究では、読書量の多い子は、自己肯定感などの「自己理解力」や、何事にも進んで取り組む姿勢などの「主体的行動力」が高い傾向がみられることが分かってきました。子どもたちに読書習慣を根付かせる、読書好きの子どもたちを育てることは大切な子育てであると言えます。

駒ヶ根市では、平成 16(2004)年に子育てを社会全体で支援していくことを目的とした子ども課が新設されました。これにより、0歳から18歳までの一貫した施策の展開と子どもの年齢に沿ったきめ細やかな支援が行われるようになりました。さらに、平成 27(2015)年3月に「駒ヶ根市 子ども・子育て支援事業計画」を策定し、子育て支援を総合的に進めてきており、現在は、第2期支援事業を展開しています。また、「駒ヶ根市 子ども読書活動推進計画」も、第1次[平成 19(2007)年～平成 24(2012)年] 第2次[平成 25(2013)年～平成 29(2017)年] 第3次[平成 30(2018)年～令和 4(2022)年]と策定され、子どもたちの読書習慣の定着を願い、取り組みが行われてきています。その主な施策は「ブックスタート」事業、「セカンドブック」事業、「よみーくちゃん巡回図書」事業、「サードブック」事業、「朝読書」、「メディアはお休み、みんなで読育」等です。

しかしながら、昨今、子どもたちの読書環境を取り巻く状況は厳しいものがみられます。スマホ、ゲーム、パソコンなどの情報通信技術を利用する時間が増える傾向にあります。また、様々な情報が身の回りにあふれ出ており、その情報に触れることが容易になっています。その結果、子どもたちの文字離れ、読書離れが進み、豊かな語彙を身に付けたり、文章の構造や内容を的確にとらえたりするなどの力が弱くなっているのではという指摘も出てきています。読書離れの傾向は、特に中高生に見られ、令和3(2021)年の1ヶ月間の平均読書冊数は小学生 12.7冊、中学生 5.3冊、高校生 1.6冊(「学校読書調査より」)と年齢が進むにつれてその傾向が強くなってきています。

このような状況を踏まえ、駒ヶ根市における子どもの読書活動をさらに推進し、読書習慣を定着させるため「第4次駒ヶ根市子ども読書活動推進計画」を策定することとしました。

本計画の達成のためには、図書館や学校、各行政機関、公共施設等はもちろん家庭、地域、民間団体等が連携・協力して取り組むことが何より重要です。

子どもたちの健やかな成長のため「協働」の心構えでのご理解とご協力をなにとぞよろしくお願い申し上げます。最後になりましたが、計画の策定にあたりお力添えをいただいた多くの市民の方々に感謝を申し上げます。

令和5(2023)年3月 駒ヶ根市教育委員会教育長 本多俊夫

I 基本計画

1 計画の目的

この計画は、読書活動を通して子どもたちの健やかな成長を図るものです。家庭・保育園・幼稚園・学校・地域・図書館・関係機関・民間団体等がそれぞれ読書活動を推進するとともに、互いに連携して、子どもが読書習慣を身につけ、読書体験を深めていくよう読書活動を推進します。そのために読書環境の整備や読書活動の普及、推進にたずさわる人たちの人材育成にも努めていきます。

2 計画の位置づけ

この計画は、「子どもの読書活動の推進に関する法律」に基づき、また「第4次長野県子ども読書活動推進計画」を踏まえて作成した計画で、今後の駒ヶ根市における子どもの読書活動推進に必要な施策に関する計画として位置づけます。

3 計画の期間

本計画の期間は、令和5(2023)年度から令和9(2027)年度までの5年間とします。

4 計画の対象

本計画の対象は、0歳からおおむね18歳までとします。

5 計画推進の基本目標

本計画を推進するために以下のとおり基本目標を定めます。

(1) 読書に親しむ機会の提供と読書環境の整備・充実

子どもの自主的な読書活動や親子読書を推進するため、読書に親しむ機会を提供するように努めるとともに、子どもの読書環境の整備・充実に努めます。

(2) 読書活動推進体制の整備

子どもの自主的な読書活動を支えていくために関係機関・民間団体が緊密に連携し、相互に協力するための効果的な支援を図ります。

(3) 読書活動についての普及・啓発

子どもの自主的な読書活動を推進するために、保護者及び地域等に読書活動の意義や推進についての啓発活動を行うとともに、読書に関する情報提供に努めます。

(4) 人材の育成と活用

地域で読書活動を行っている個人や団体等を支援するとともに、読書活動支援者の育成を図り、活動の場の提供と交流の機会を図ります。

司書等を国及び公共機関等の実施する講習・研修会に参加させるなど、専門的知識・技術の習得に努めます。また市立図書館、市内各学校図書館に司書の適正配置がされるよう促します。

《駒ヶ根市子ども読書習慣形成の六つの柱》

- ① 本との出会いに（ブックスタート：6ヶ月児 絵本のプレゼント等）
- ② 読書習慣形成に（セカンドブック：2才3ヶ月児 絵本のプレゼント等）
- ③ 幼稚園・保育園の読書支援に（よみーくちゃん巡回図書事業等）
- ④ 読書習慣の定着に（サードブック：小学1年生 本のプレゼント等）
- ⑤ 生涯読書の基盤に（朝読書の推進、おはなし会・読み聞かせ会の開催等）
- ⑥ 自ら学ぶ調べる学習の推進に（図書館を使った調べる学習コンクールの実施等）

Ⅱ 第3次駒ヶ根市子ども読書活動推進計画の取り組みと課題

1 取り組み

駒ヶ根市では、平成29(2017)年度に「第3次駒ヶ根市子ども読書活動推進計画」が策定されました。そして、平成30(2018)年度より「読書に親しむ機会の提供と読書環境の整備充実」「読書活動推進体制の整備」「読書活動についての普及・啓発」「人材の育成と活用」を基本目標に掲げ、子どもの読書活動を推進してきました。その主な取り組みは

(1) 「ブックスタート」事業

乳幼児に対しての読書支援では、平成13(2001)年度から、県内でもいち早く5ヶ月児を対象にしたブックスタート事業を発足させました。その際、対象の親子に読み聞かせの実演や保護者への啓発を行い、あわせて絵本のプレゼントを行ってきました。(平成25(2013)年度からは、6ヶ月児育児相談時に変更)

(2) 「セカンドブック」事業

平成19(2007)年度より、2歳3ヶ月児の育児相談の折にも、読み聞かせの実演と保護者への啓発を行い、平成23(2011)年度からは絵本のプレゼントも加わり、セカンドブック事業の充実を図ってきました。

(3) 「よみーくちゃん巡回図書」事業

平成21(2009)年度より、市内13の幼稚園・保育園に、図書館からコンテナボックスに約50冊入った絵本を1ヶ月交代で巡回する事業を始めました。これは各園から家庭への貸出も可能で、各園に1年間に650冊近くの本が巡回し利用できることになりました。

(4) 「サードブック事業」(「きになる本 みのなる本」プレゼント)

平成24(2012)年度から、サードブック事業も実施されました。子どもたちに、よりよい読書経験が得られるよう、お薦め本のリストを作成し、このリスト「きになる本 みのなる本」を、市内小学校一年生全員にプレゼントしました。また、市内小中学校と市立図書館でリストの本を読み進めてもらう取り組みとして、スタンプラリーを実施してきました。

(5) 朝読書の推進

平成19(2007)年度より、市内の全小中学校で朝読書が始まりました。そのなかで中学校では、朝の部活動から戻った生徒が静かに朝読書を始めることで、学校生活のスタートを心静かに迎えるとともに読書の良さを実感する姿がみられるようになりました。

(6) 「テレビを消して家族で読書」(ノーテレビデー)

毎月第3水曜日を家族読書の日と定め、家庭での読書活動の普及を図るとともに、テレビ、ゲーム、パソコン等のメディア漬けからの脱却を図るためテレビを消して家族での読書を働きかけました。

(7) 「図書館を使った調べる学習コンクール」の実施

子どもたちに、自分が持った疑問や課題を本によって解決する楽しさを体得し、その有効性を感じてほしいと願い、平成 29(2017)年度より実施してきました。市内の子どもたちに次第に定着し、年々多くの参加がみられようになりました。

(8) 読み聞かせボランティア等の連携

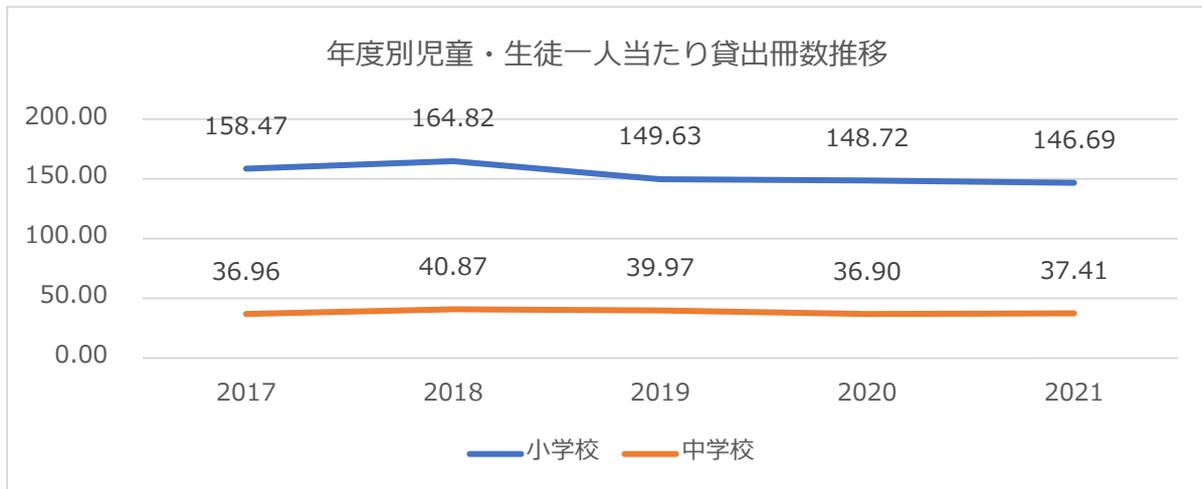
読み聞かせボランティアの方々と連携することを通して、多くの場での読み聞かせを行うことができました。また、読み聞かせボランティア対象の講座を行うことを通して、読み聞かせ技術の向上を図りました。

2 成果と課題

(1) 成果

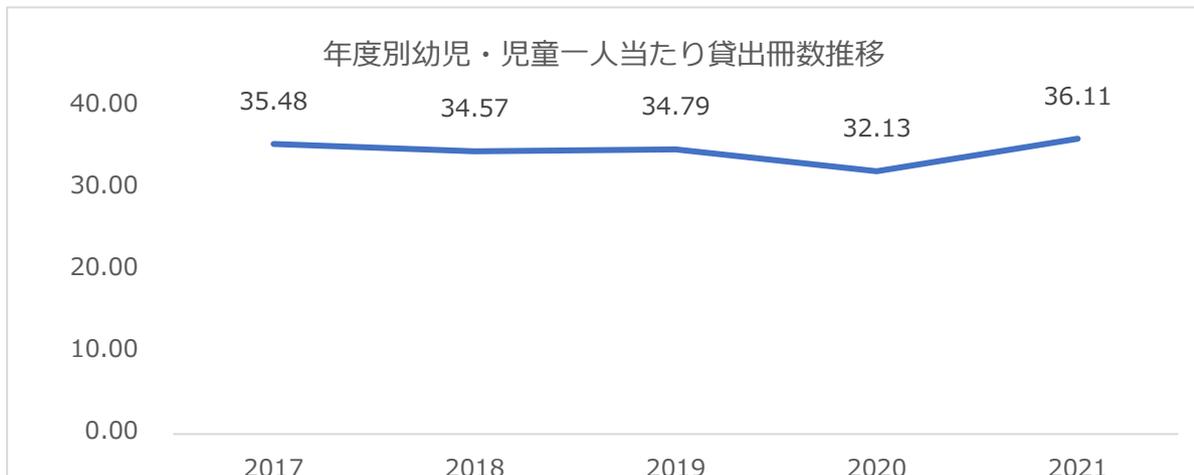
<年度別児童・生徒一人当たりの貸出冊数推移(学校)>

(市内各小中学校図書館での児童書及び絵本の総利用冊数÷市内児童・生徒数)



<年度別児童・生徒一人当たりの貸出冊数推移(市立図書館)>

(駒ヶ根市立図書館での児童書及び絵本の総利用冊数÷市内幼児・児童数)



令和元(2019)年～令和3(2021)年は新型コロナウイルス感染症流行のため、それ以前のデータとの比較は難しいですが、平成29(2017)年と令和3(2021)年の一人当たりの年間貸出冊数を比べると小学校は若干減少傾向がみられます。一方、中学校、市立図書館は令和3(2021)年の方が数値は向上しています。小学校は令和元(2019)年～令和3(2021)年にかけて図書室の閉館日数や制限下での開館日数が多く、その結果が数値に反映されていると考えられます。それらを考慮した上で、子どもの読書離れ、活字離れが危惧される中でも、第3次子ども読書活動推進計画の取り組み内容が一定の成果をあげていることがうかがえます。

(2) 課題

子ども読書活動にかかわり、1ヶ月の間に1冊も本も読まない子どもたちに、どのような方策で読書習慣を形成させていくかが大きな課題です。1ヶ月に1冊も本を読まない子どもの割合を示す「不読率」の値は次の数値です。

<駒ヶ根市児童生徒の不読率の割合>

		駒ヶ根市の児童生徒の不読率の割合			全国の不読率の割合 令和3 (2021)年*1
		平成24 (2012)年	平成29 (2017)年	令和4 (2022)年	
小学校 高学年	全回答人数	514人	588人	631人	5.5%
	不読者割合	3%	1%	3%	
中学校	全回答人数	267人	426人	424人	10.1%
	不読者割合	12%	6%	8%	
高校	全回答人数	933人	727人	815人	49.8%
	不読者割合	32%	22%	20%	

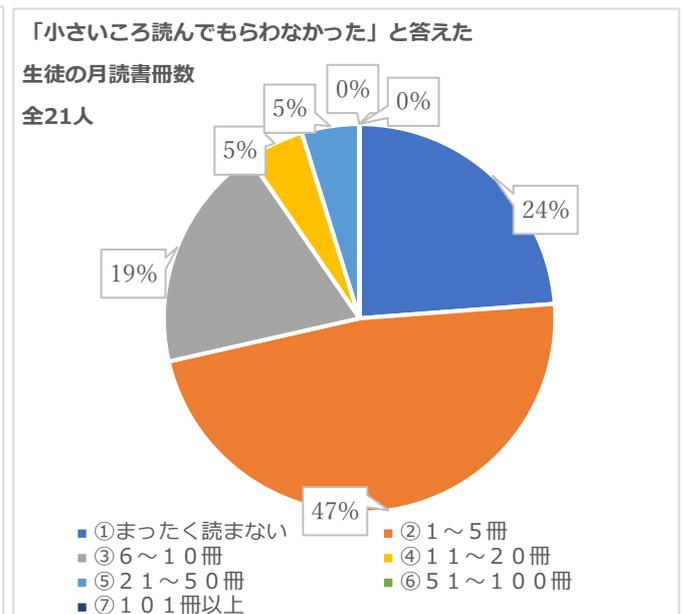
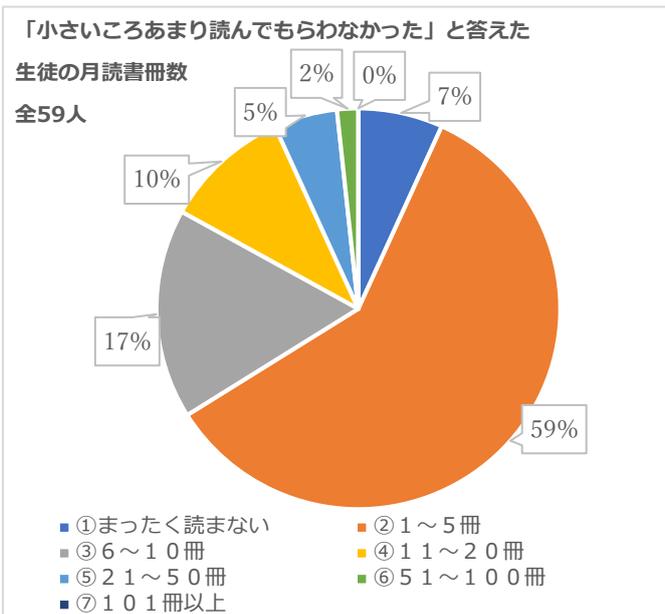
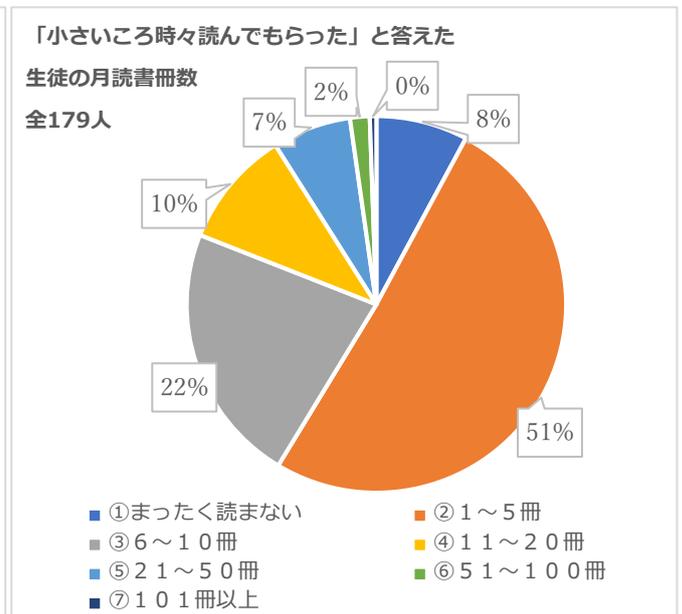
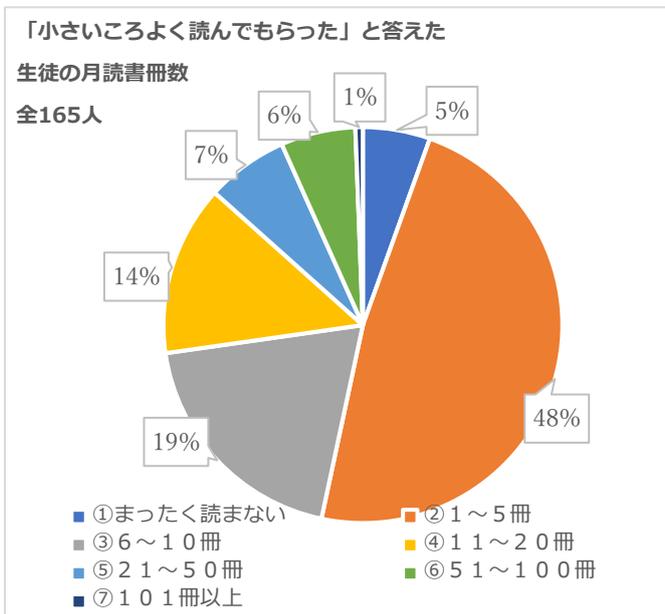
*1 令和3(2021)年第66回学校読書調査より

小中学生、高校生いずれも中長期的に見て、全国の数値に比べ、低い状況で推移しています。これは、駒ヶ根市内の小中高で実施されている朝読書が子どもたちの読書習慣形成に良い影響を与えていると考えられます。しかし、小学校高学年、中学生の不読率の数値が若干高くなる傾向がみられること、また、高校生の20%がほとんど読書をしないことなど改善すべき課題がみられます。

また、スマホの普及やコミュニケーションツールの多様化など、子どもを取り巻く情報環境が大きく変化し、今後、子どもたちの読書離れが加速することが懸念されます。子どもたちの現況を分析しながら、読書習慣形成の方向を検討することが必要です。

幼少期の読書経験（読み聞かせ等）の重要性を示す中学生の調査結果があります。本を「小さいころよく読んでもらった」経験のある中学生で、現在、「まったく読まない」と答えた生徒の割合は5%であるのに対して、「読んでもらわなかった」生徒で現在「まったく読まない」と答えた生徒は24%になりました。また、「よく読んでもらった」「時々読んでもらった」を合わせた、いわば、幼少期の読書経験が豊かな生徒で、現在「まったく読まない」と答えた生徒が6%に対して、「あまり読んでもらわなかった」「読んでもらわなかった」を合わせた幼少期の読書経験の少ない子では12%となっています。

読み聞かせ等の、幼少期の読書経験が多い生徒ほど「不読率」が低く、幼少期の読書経験が少ない生徒ほど「不読率」が高いことが分かりました。生涯にわたって本に親しむ子どもを育てるためには、幼少期にいかに質の高い読書経験をさせ、その身に付いた読書習慣を小中学校・高校と継続させていくかが重要であると考えられます。



Ⅲ 推進のための具体的な取り組み

1 読書活動の推進

(1) 家庭での読書活動の支援

子どもの生活の基盤である家庭は、子どもの基本的な生活習慣を育む場であり、健やかな成長を支える場です。子どもたちの読書習慣が形成されるためには、読書が家庭生活の中に位置づけられ、継続して行われる必要があります。家庭での読書活動を推進させるためには、子どもを育てる保護者が読書を通して豊かな人間性、教養を身につけること、そして、読書が子どもの心や各種能力に及ぼす効果を理解することが大切です。保護者自身も子どもとともに読書を楽しみながら、読書環境を継続的につくっていく必要があります。

子どもたち、特に、乳幼児期の子どもたちにとって、保護者による読み聞かせがとても重要になります。

乳幼児期の子どもたちは、周りの大人との会話の中で言葉を次第に獲得していきます。さらに、読書による絵本や物語の世界の中での体験を通して、言葉のイメージを膨らませながら、豊かに言葉を獲得していきます。また、絵本の読み聞かせは、読み手と聞き手の関係を深め、信頼関係を培うと言われます。子どもたちは、信頼する読み手とのかかわりの中で、安心して物語の世界に浸ることができます。

現在、テレビ、パソコン、スマホ等の普及により、子どもたちのゲームや動画視聴にかける時間が増え、読書への関心が希薄になっています。中学生が家庭で、一日にゲームやスマホに費やす時間は、1～2時間が最も多く27%、さらに2時間以上は20%となり、約半数の中学生が毎日1時間以上ゲームやスマホを使用していることが分かりました。ゲームやスマホにかかわる時間を減らし、家庭での読書を定着させる支援に取り組むことが求められます。

(数値はいずれも令和4年7月のアンケート結果による)

具体的な取り組み

「乳幼児・児童が本に親しむきっかけづくり」

- ・ブックスタート・セカンドブック事業の充実【6ヶ月児(ブックスタート)、2再3ヶ月児(セカンドブック)に絵本のプレゼント及び読み聞かせの実施】
- ・おはなし会0.1.2(乳幼児向け)【月2回】、幼児向け【月1回】、小学生向け【月1回】等おはなし会での、読み聞かせ・語り・わらべうた遊び等の実施

「家族読書の定着化を目指し」

- ・乳幼児には『おやすみ前の親子のふれあい 絵本とともに』の合言葉で、絵本の世に利かせの習慣化を促進
- ・「家族読書の日」(毎月第3水曜日)を設定し、小中学生及びその保護者を中心に『メディアはお休み、みんなで読育』の啓発活動の実施
- ・本の修理やブックコート講座等の開催で、本を大切にすることを育む機会の提供
- ・ありがとう Books(本の配布)、ねえ、この本読んで！(図書館内での読み聞かせ)の実施

(2) 幼稚園・保育園での読書活動の支援

幼児期は少しずつ自立性を発達させながら、生きるためのいろいろな基礎を確立していく時期です。幼児は母親や父親など特定の大人との間に愛着関係を形成していきます。さらに、複数の大人とのかかわりを深め、それらの愛着関係をもとに、安心感や信頼関係を育みながら成長していきます。また、身体の発育とともに食事や排せつなどの自立が可能となるとともに、睡眠などの生活のリズムが形成されます。さらに、自分を取りまく人や物、自然などの環境に意識が向き、体験などを通してその存在に気付き始めます。

こうした、自分の周りのいろいろな環境に興味を示し始め、生活リズムが形成されるこの時期にこそ、読書習慣の基礎を築く必要があります。読み聞かせは、この時期の自分を取り巻く環境に対する興味を充足させてくれます。そして、子どもたちは、信頼関係に支えられた親からの読み聞かせにより、安心して物語の世界に浸ります。

また、親以外の身近な大人である幼稚園・保育園の先生方等が読み聞かせを行うことは、自分を取り巻く大人との信頼関係を築きながら、社会性を育てていく上でとても有効です。

現在のわが国では、幼児期における、親の子育てへの無関心、放任、また、甘やかしすぎや虐待など多様な課題が指摘されています。読み聞かせ等を通じた読書習慣形成を、保育園、幼稚園などを中心に支援をしていくことは重要な子育て支援につながるものと考えられます。

具体的な取り組み

《幼児の読み聞かせ体験の充実》

- ・園での日常的な読み聞かせ時間の確保
- ・図書館による「読み聞かせ出前事業」の活用
- ・「読み聞かせボランティア」の活用
- ・子育ての中における「家族で読み聞かせ」の呼びかけ

《読書環境の充実》

- ・幼稚園、保育園の本の充実とその支援
- ・「よみーくちゃん巡回事業」の促進
- ・市立図書館本館及び分館での子どもの興味を大切にした絵本などの幼児対象本の充実

《家庭への啓発》

- ・乳幼児を対象とした読み聞かせ事業への参加呼びかけ
- ・図書館での行事、催しを通しての図書館利用の促進
- ・クリスマスお楽しみ会、こどもまつり等の行事への参加呼びかけ

(3) 小学校での読書活動の支援

子どもたちが生涯にわたり読書に親しむ習慣を形成していく上で、小学校時の読書との向き合い方はとても大切です。そこで得られる読書経験は、その後の人生において、かけがえのないものとなります。また、この時期の子どもたちにとっては、今までの絵本や物語中心の読書から、知識を得たり調査を行ったりなど、発達段階に応じて読書の幅が広がっていく時期でもあります。

小学校学習指導要領には「読書」について次のように記載されています。

『読書は、国語科で育成を目指す資質・能力をより高める重要な活動の一つである。自ら進んで読書をし、読書を通して人生を豊かにしようとする態度を養うために、国語科の学習が読書活動に結び付くよう発達の段階に応じて系統的に指導することが求められる。』さらに、『なお、「読書」とは、本を読むことに加え、新聞、雑誌を読んだり、何かを調べるために関係する資料を読んだりすることを含んでいる。』とあります。

小学校期では、生涯読書の基盤をつくるために、幼少期より一歩進んで、自ら進んで読書をしようとする姿勢が求められます。そのためには、なによりも子どもたちが本に触れる機会、本を読む楽しさを感じ取る機会を提供していく必要があります。また、課題解決、調査活動としての読書及び図書館利用を促進するために、学校との連携を深め、教科学習や諸活動等での有意義な図書館利活用の推進を図っていく必要があります。

具体的な取り組み

《本に親しむ機会づくり》

- ・ サードブック事業の充実【新1年生に本のプレゼント】
- ・ ブックリスト「きになる本 みのなる本」の活用
- ・ 学校での読み聞かせの実施
- ・ 全校実施の朝読書の推進と支援

《読書の幅を広げるために》

- ・ 図書館を使った調べる学習コンクールの実施
- ・ 担任と学校司書が連携して、アクティブラーニング、調べる学習への支援と授業に活かす図書館利用の促進
- ・ 各学校がそれぞれの学校の実情を考慮しての読書旬間、スタンプラリー等の実施

《学校図書館と市立図書館との連携》

- ・ 各学校での読み聞かせボランティア活動推進に向けての支援
- ・ 公共図書館と学校図書館の同一システムの利点を生かした本の流通の充実
- ・ 各種コンクールや行事等、学校図書館と公共図書館の共同での実施
- ・ 市立図書館開催の小学生向けおはなし会での読み聞かせ等の実施
- ・ 市立図書館での講習会や体験的な活動の実施
- ・ こどもまつり、図書館まつり等の行事の充実

(4) 中学校での読書活動の支援

この時期の子どもたちは精神的にも肉体的にも大きく変化をしていきます。物事に対する考え方も次第に大人へと変化するとともに、自分を取り巻く多くのことに対して悩み、日々葛藤するような時期でもあります。自我が芽生え、自分の生き方に思いを馳せるこの時期にこそ多くの書物に触れてほしいものです。

その一方で、部活動や受験勉強などにかかる時間が増え、読書から離れていってしまう傾向もみられます。アンケートの結果でも、一日に読書にかける時間が0分と答えた生徒は35%、30分以内と答えた生徒は36%です。およそ7割の生徒が一日の読書時間が30分以内と答えています。ただ、ゲームやスマホにかける時間は1時間から2時間と答えた生徒が最も多く、単に時間がないから読書にかける時間が少なくなっているとは言い切れない面もあります。このような状況の中、読書の大切さを継続的に伝え続け、全く読書しない子への支援を手厚くし、不読率を下げるのが大切です。

中学校学習指導要領では読書について次のように述べられています。

『読書意欲を高め、日常生活において読書活動を活発に行うようにするとともに、国語以外の教科における読書の指導や学校図書館における指導との関連を考えて行うこと。学校図書館の利用に際しては、本の題名や種類などに注目したり、索引を利用して検索をしたりするなどにより、必要な本や資料を選ぶことができるように指導すること。なお、生徒の読む図書については、人間形成のため幅広く、偏りが無いように配慮して選定すること』とあります。

中学校期の子どもたちにこそ、幅広い読書を通して多くのことを学び、その価値を理解してもらいたいものです。

具体的な取り組み

「本に親しむ機会づくり」

- ・ 全校実施の朝読書の推進と支援
- ・ 生徒会・図書委員会による生徒の主体的な図書館運営
- ・ 図書館だより等を用いての新刊本や話題本、生徒が興味を引く本の情報提供

「読書の幅を広げるために」

- ・ 図書館を使った調べる学習コンクールの実施
- ・ 授業テーマに必要な参考資料の充実と、積極的な情報の提供
- ・ 各学校がそれぞれの学校の実情を考慮しての読書旬間、ポップづくり等の実施
- ・ 中学生による読み聞かせ活動の奨励

「学校図書館との連携」

- ・ 『調べる学習コンクール』に向けての生徒等によるオリエンテーション
- ・ 公共図書館と学校図書館の同一システムの利点を生かした本の流通の充実
- ・ 各種読書にかかわるコンクール、行事等、学校図書館と公共図書館の共同での実施

(5) 高等学校での読書活動の支援

この時期は、卒業後の進学、就職を控え『親の保護のもとから、社会へ参画し貢献する、自立した大人となるための最終的な移行期間である。思春期の混乱から脱しつつ、大人の社会を展望するようになり、大人の社会でどの様に生きるのかという課題に対して、真剣に模索する時期である。』（文科省「子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題」より）

この時期の生徒にとって読書は有意義な活動であることは言うまでもありません。すぐれた文学に描かれた、登場人物の多様で魅力的な生き方は、自らの生き方について考える良い機会になると共に、書物に表わされる、美しい芸術、自然、人間の生き方に感動し心を開かされます。さらに、この時期の読書経験こそが生涯読書の基礎となるものと思われまます。

しかし、高校生の読書離れは深刻です。令和3(2021)年の全国調査では、高校生の約半分以上が全く本を読まないという結果が出ています。

〈高校生の本を読まない割合〉 *1 全国学校読書調査より

高校生の不読率		平成 23 (2011)年	平成 28 (2016)年	令和 3 (2021)年
	全 国 *1	50.8%	57.1%	49.8%
	駒ヶ根市	30.0%	22.0%	20.0%

本を読まない理由で多くを占めるのは「他の活動で時間がない」、「他にしたいことがある」等でした。

一方、駒ヶ根市内の高校生の不読率は20%で、全国の割合に比べて大幅に低いという結果もあります。いろいろと理由が考えられますが、市内の高校では、読解力をつけることや文章に親しむことを目的に、朝読書の時間を取り入れています。生徒たちの本に触れる機会や環境を整えていけば、その良さを体感しその価値を見出し、生涯読書につながるものと思われまます。

具体的な取り組み

「本に親しむ機会づくり」

- ・ 全校実施の朝読書の推進と支援
- ・ 新刊本や話題本、専門書、古典の名作等、生徒の興味を引く情報を図書館だよりやポップ等での提供

「読書の幅を広げるために」

- ・ 図書館を使った調べる学習コンクールの実施
- ・ 授業テーマに必要な資料の充実と、積極的な情報の提供
- ・ 幼稚園・保育園・小学校、公共施設への読み聞かせ活動の推進とサポート(授業・ボランティア)
- ・ アクティブラーニング等能動的な学習支援のためのレファレンスの実施

「公共図書館との連携」

- ・ 団体貸出や相互貸借による高校図書館と公共図書館との連携の推進

(6) 図書館での読書活動の支援

図書館で子どもたちは、生き生きとして本を選び、手に取り、本を読みます。また、大人に本を読んでもらい満足げに聞き入る姿も見られます。さらに、長時間、学習に浸る中高生の姿も多く見られます。そして、保護者にとっては子どもに読ませたい、読み聞かせたい本を探す大切な場になっています。子どもの読書活動を推進するために、公共図書館はその中核的な役割を果たしていることは言うまでもありません。子どもたちにとって良い読書環境をつくる、これは公共図書館の使命であると言えます。

具体的な取組み

《蔵書・資料の充実》

- ・子どもたちが読みたい本、興味を持ちそうな本、また、子どもたちに読んでほしい質の高い本など、充実した蔵書構成のための選書
- ・各年齢層や発達段階を考慮した、幅広い蔵書の充実
- ・読書、読み聞かせ等多様な読書活動に対応できる選書の充実

《本に親しむための各種サービスの充実》

- ・ブックスタート【読み聞かせ、絵本のプレゼント、親への啓発等】
- ・セカンドブック【読み聞かせ、絵本のプレゼント、親への啓発等】
- ・サードブック【本のプレゼント等】の実施
- ・ブックリスト「絵本の森」「きになる本みなる本」の改訂と利用促進
- ・各種おはなし会【0.1.2(乳幼児対象)、幼児対象、小学生対象】の実施
- ・幼稚園・保育園、児童関連施設への絵本等の団体貸出の実施（よみーくちゃん巡回事業、よみーくボックス等）
- ・幼稚園・保育園、地域子育て支援事業等への出前事業（お出かけ図書館）の実施
- ・クリスマス会、お楽しみ会など各種行事の実施
- ・全国読書週間に合わせた読書推進活動の実施

《選書しやすい環境の充実》

- ・赤ちゃん、幼児、小学校低・中・高学年、中学生、高校生と、それぞれの年齢にあった、わかりやすい配架の工夫やお薦め本コーナーの設置
- ・保護者やボランティアなどの選書に役立つ、「読み聞かせのきほん」コーナーの設置
- ・児童・保護者等の選書や本探しでの、司書によるレファレンス・読書相談サービスの充実

《情報発信サービス》

- ・図書館だより、図書館ホームページ、市報、文化センターだより（カリヨン）、テレビ図書館（ケーブルテレビ）、市のメールおよび LINE 配信等により、新着本・行事等の情報発信

- ・「家族読書の日」の周知と家庭への啓発活動の実施
- ・子ども読書活動の大切さを周知するため、地域や学校など様々な場面や機会を通しての啓発活動

《人材育成》

- ・司書等の養成及びスキルアップのための研修・講習への参加の促進
- ・市内司書会を定期的に実施し、図書館資料の充実や読書指導充実のための実践の共有化
- ・読み聞かせボランティアのスキルアップのために経験、技術に応じた研修や講習会の実施

《障がいのある子ども等への読書活動の推進》

○障がいのある子どもへの読書活動の推進

- ・車椅子・スロープ・点字ブロック等の施設の整備
- ・サピエ図書館と連携してのデイジー図書、点字資料、音声データのサービスの実施
- ・介助などの支援の実施
- ・ニーズに応じた図書の整備

○外国籍等の子どもへの読書活動の推進

- ・多言語による児童図書、コーナーの整備
- ・多言語による利用案内や館内の掲示

2 関係機関、団体、ボランティア等との連携

(1) 市民団体やボランティアとの連携

- ・読み聞かせボランティアの組織づくり及び研修会の実施
- ・図書館主催のおはなし会やお楽しみ会、地域の読書活動支援事業への協力の促進

(2) 学校との連携

- ・図書館・学校ネットワークの活用（学校間・図書館との相互貸借の推進）
- ・読み聞かせ、講座等の出前事業の実施
- ・学校読み聞かせボランティア対象研修会の実施
- ・学校図書館と公共図書館が連携しての行事、催しの実施
- ・図書館見学、職場体験学習の受け入れ

(3) 幼稚園・保育園との連携

- ・「よみーくちゃん巡回図書事業」（本の貸出）の実施
- ・行事等でのおはなし会の出前事業の実施

(4) 市行政機関との連携

〈子ども課との連携〉

- ・ブックスタート、セカンドブック、サードブックの実施
- ・健診・育児相談時の読み聞かせ（6ヶ月児・2歳3ヶ月児）の充実
- ・子育て支援センターでの読み聞かせ（0～3歳児・親）の実施

〈公民館との連携〉

- ・地域分館での読み聞かせ（0～2歳児・3歳児、親）の支援
- ・各種講座への支援

〈公民館・子ども課との連携〉

- ・よみーくちゃん巡回ボックスの設置

〈商工観光課等との連携〉

- ・各種施設への図書コーナーの設置
- ・図書館内での駒ヶ根市観光案内コーナーの設置

(5) 地域住民・各種団体及び施設等との連携

- ・地域子育て支援事業等への出前事業
- ・市民団体主催のイベントでの読み聞かせ等の支援
- ・雑誌スポンサー制度を利用しての児童雑誌充実を促進

(6) 具体的取り組みにおける関係機関・団体との相関図・・・図1参照

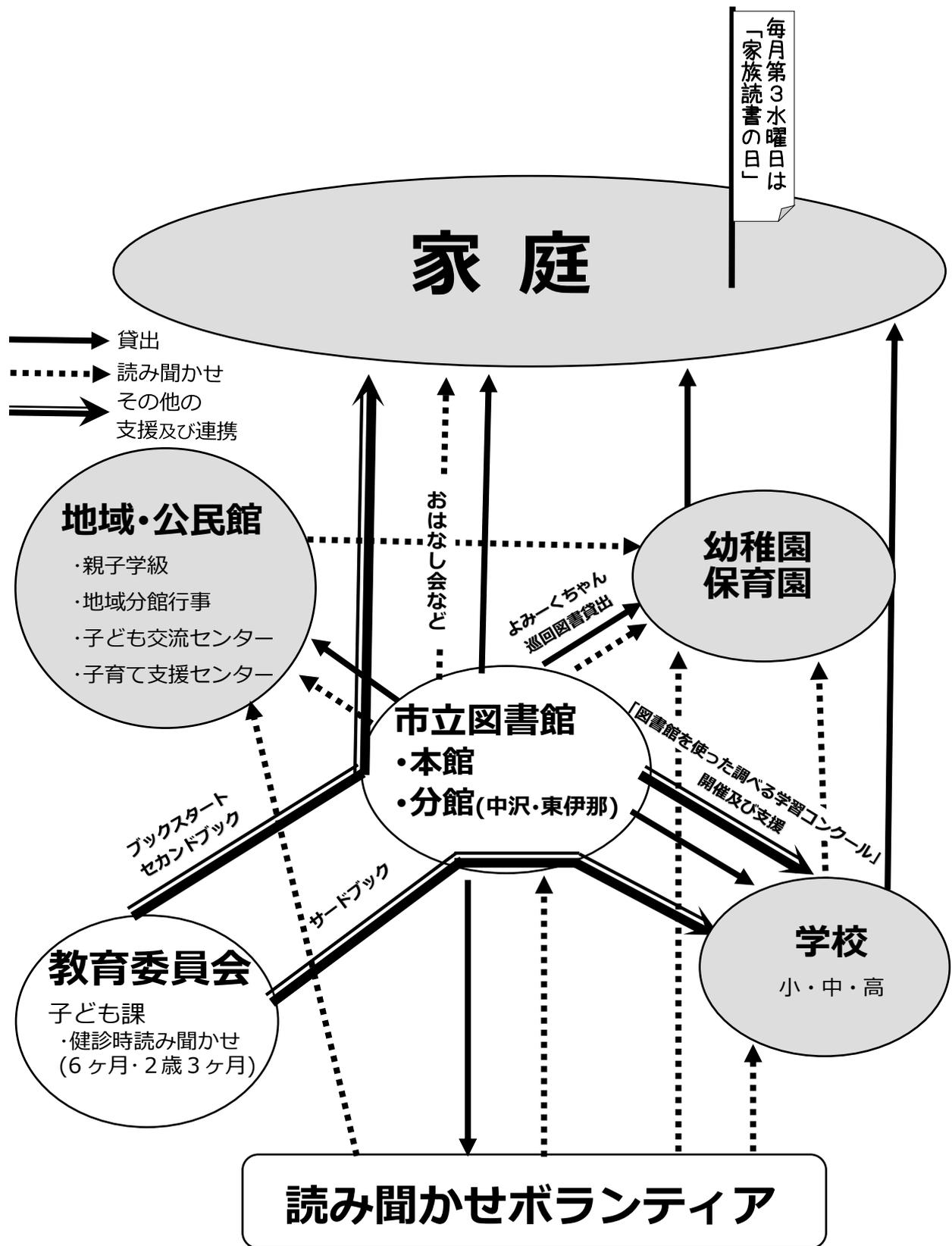


図1. 具体的取り組みにおける関係機関・団体との相関図

3 計画の目標

第4次駒ヶ根市子ども読書活動推進計画の基本計画や具体的な取り組みをもとにした全体の目標数値を次の5項目とします。図書館では、数値をもとに評価を行い、課題を明確にしながら社会の変化に対応した取り組みや、事業の見直し、改善を行ってまいります。

(1) 駒ヶ根市立図書館における子ども(18歳以下)の利用登録率

年度	現状値			目標値
	令和元 (2019)年	令和2 (2020)年	令和3 (2021)年	
利用登録率 (%)	45	46	46	48

※駒ヶ根市年齢別人口(0～18歳)をもとに、駒ヶ根市立図書館に登録している人数(0～18歳)の割合

(2) 駒ヶ根市立図書館における貸出冊数

① 絵本の貸出件数

年度	現状値				目標値
	令和元年 (2019)	令和2年 (2020)	令和3年 (2021)	平均値	
絵本の貸出冊数	55,976	51,524	55,743	54,414	55,000

② 児童書の貸出件数

年度	現状値				目標値
	令和元 (2019)年	令和2 (2020)年	令和3 (2021)年	平均値	
児童書の貸出冊数	29,888	25,865	27,055	27,602	28,000

※令和2(2020)年度、3(2021)年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響が大きい
ため、平均値を出して目標値を設定した。

(3) 不読率の割合（アンケートでまったく本を読まないと答えた子どもの割合）

	現状値		目標値
	人数	不読率(%)	
小学校	1,112	4.5%	4%
中学校	424	8%	7%
高校	815	20%	18%

(4) 保護者による読み聞かせ（回答者数 234 人）

	現状値(%)	目標値 (%)
3 日以上実施すると答えた合計数値の割合	65	70

※2 歳 3 ヶ月児保護者、幼児保護者アンケート結果より、「絵本を 1 週間にどのくらい読んであげていますか」の回答で 3 日以上実施すると答えた合計数値の割合

(5) 子ども向け事業数と参加人数

	現状値(%)			目標値(%)
	令和元 (2019)年	令和 2 (2020)年	令和 3 (2021)年	
事業数(回)	127 (内 7 回中止)	119 (内 34 回中止)	109 (内 41 回中止)	130
参加人数(人)	4,632	2,815	1,977	4,700

- ・ 事業内容は
 - ① 各種おはなし会 ② ブックスタート、セカンドブック ③ お出かけ図書館
 - ④ 調べる学習コンクール相談会 ⑤ 各種お楽しみ会等、参加人数が把握できる事業
- ・ 事業回数には、予定をしていたが新型コロナウイルス感染拡大等で実施できなかった事業も含める
- ・ 参加人数は保護者等、参加した大人の人数も含める